

海外在住家庭における親の養育スタイルと学齢期の子どものグローバルアイデンティティ (JSPS KAKENHI Grant Number17K01823)の報告

女子栄養大学 平田裕美

シンガポール日本人学校小学校チャンギ校の保護者のみなさま、昨年度 11 月には、アンケート、インタビューにご協力いただき、ありがとうございました。同時に保護者セミナー「チャンギ de カフェ 大学入試改革を見据え親が子どもにできること：子どもの自尊感情と親の自尊感情は比例する」を開催させていただきましたが、その時のセミナー補足も含めて、今回のアンケート、インタビューの結果を、ここに報告させていただきたいと思います。

今回のアンケートは、シンガポール、パース、クライストチャーチ、ウェリントンにて、全て同じ項目（日本語版、英語版）で尋ねました（父親 638 名、母親 716 名）。シンガポールとオーストラリアは日本人学校がありますが、ニュージーランドには日本人学校がありません。そのため、生徒数を鑑み、パース、クライストチャーチ、ウェリントンは現地校、またはインターナショナルスクールに通いながら、月・水曜日、あるいは土曜日のみ自宅から近距離にある日本語補習授業校（小学部・中学部）に通う生徒の保護者のみなさまにアンケート、インタビューの協力をいただきました。

まず、今回のアンケートの目的は、「海外で子どもを育てているお父さま、お母さまの養育行動を促す要因とは」を課題に、親の養育行動（子どもとの会話を中心としたコミュニケーション・しつける行動）への親自身がもつレジリエンス（たとえ困難な状況であっても、素早く立ち直り、状況に適応して自ら生き延びようとする力）、自尊感情、異文化理解（多様な文化や習慣に関わろうとする志向）による影響を検討しました。



共分散構造分析という解析より、お父さま、お母さま共に、肯定的に未来を見据えるなどのレジリエンス、人や文化を理解しようとする志向が高いほど、小学生の子どもとの会話を中心とした養育行動が多いということが明らかにされました。すなわち、チャレンジ志向が強く、前向きな将来計画や目標に取り組もうという考えが強いほど、また、海外在住する機会があれば渡航したい、その土地の文化や習慣を知りたい、ルールやマナーを実践したいという考えが元々強いほど、お父さま、お母さまの子どもへの会話中心の養育行動が多くなっていました。また、お父さま、お母さまの世帯セット比較より、この傾向は、特にお父さまに顕著であることも信頼度の高い数値で認められました ($p < .001$)。

次に、家庭におけるしつけに関する養育行動では、お母さまについての差異はありませんでした。しかし、シンガポールと英語圏の差異というよりも、日本人お父さまと母語が日本以外の国のお父さまには差異がありました。

項目分析より、日本人お父様は「注意する、叱る」、または「注意しない」というしつける行動であったことに対し、母語が日本以外の国のお父さまは「禁止する」というしつける行動でした。

今回の調査では、日本人のお父様は、注意はするが、まずは子どもの意見を聞くという関わりを重視されているようでしたが、母語が日本以外の国のお父さまは、(内容によるのですが)子どもに有無を言わせない、ダメなものはダメという禁止の考えをかなり強く持ち、その考えを行動に示されているというのが特徴でした。

さらに、自由記述「海外で子どもを育てる」長所と短所で記載いただいた内容をカテゴリー別にカウントすると、長所として、多様な文化に触れられる、異文化への抵抗が少ない価値観を身につけられるという可能性を記された記述が多い反面、課題として、順に、①言語習得、②学習、③学校選択の問題についての考えが示されていました。

セミナー時にも説明させていただきましたが、言語習得では、第一言語(母語)の基盤無くして、第二言語の習得は難しいという二言語相互依存説(Cummins・中島, 1985; Cummins・Swain, 1986)が提唱されています。しかし、英語圏在住家庭、または英語を必要以上に重視する家庭では、**子どもをバイリンガルに育てようとする親の意向**により、母語の基礎や生活準備なく現地の学校、インターナショナルスクールでの生活を強いられる子どもが多い。そのため、**年齢相応に自分の意思を語るができないダブルリミテッドに育つ危険性**が、かなり早くから指摘されていました(栗原・森, 2006)。また、幼少期からの海外在住により、「日本人として生きていくのか、現在住んでいる国の人として生きていくのか」などの**民族性を含む子どものアイデンティティの揺らぎ**に関する報告(佐藤・片岡, 2008)からも、海外在住経験と子どもの心身への負荷との関連は明らかです。英語圏日本人コミュニティでは、「英語圏に来たのだから現地校通学」という保護者の現地校通学志向があるのも事実でした。しかしその一方、現地校通学の「だんだん日本人の感覚ではなくなる子ども」との意思疎通に不安を訴える保護者のご意見もあり、帰国予定がある短期・長期滞在家庭、そして永住家庭の日本語補習授業校への期待は、子どもの日本語学習をサポートする教育機関としてだけでなく、親自身の日本人との関係づくり、自らの「日本人である」アイデンティティ確認の場という意味でも大きくなっていました。そのため、長期、短期、永住に関係なく、海外に在住している子どもの親である保護者のみなさまには、セミナーでの報告や知見を理解していただいた上で、学習や学校選択について、お子さまとじっくりと話し合う機会をより多く持つていただきたいと願っています。最後に、

日本の教育事情：大学名が入った通称「赤本」も変わる

保護者のみなさま、大学入試のため、各大学名の入った通称「赤本」を覚えていらっしゃるでしょうか。遠い昔、私も高三の時に、親に買ってもらいました。日本の新学習指導要領(2022年度実施)では各科目に「探求」という名前がつきます(たとえば「古典探求」など)。セミナー時にプレ問題をスライドで見させていただきましたように、**大学入試問題の回答は、これまでの「ひとつだけ」から「複数」になります。**

そのため、各大学とも検討委員会をなるものを立ち上げ、他大学の動向も見ながら対応を考えています。一方、日本の大学入試に英語外部試験が取り入れられます。オーストラリア、ニュージーランドはイギリス系大学になるので、IELTSでの受験「可能」は、日本の大学も進学選択対象として、より大きな存在になるのではないかと期待されています。

あらためて、このたびは、アンケート、インタビューのご協力、また保護者セミナー開催の機会を設けてくださり、心より感謝しています。ありがとうございました。これからも海外在住の保護者の皆さまの子育てに有益になるような情報を探してまわり、検討していく所存です。

また、いつの日か、ご報告できるような機会があれば幸いです。
シンガポール日本人学校チャンギ校のますますのご活躍を祈ります。ありがとうございました。

